



学校はアセスメント情報の宝庫

まだまだ暑い日が続く勢いですが、そんな過酷な環境下で学校生活が再開しました。子どもたちの様子はいかがでしょうか。7月まで逸脱行動が激しかった子が思いのほか落ち着いていることもあれば、気がかりな行動が増えて心配な子もいるかも知れませんね。暑さの影響や、暑さによる行動制限（屋外活動など）の影響が一因となっている場合もあることでしょう。

子どもの問題行動や学力不振の背景・事情を探り（アセスメント）、関係者間で共通理解を図ることが“個別最適な指導”には欠かせません。何がネックでこの問題が生じているのか、その問題にはどんな意味があるのかについて仮説を立て、そうだとすれば、どのような支援が考えられるかを検討し、試してみて評価するという考え方・進め方です。



アセスメントのための材料の一つに、個別式知能検査などの心理検査の結果があります。教育センターでは必要に応じて“田中ビネーV”又は“WISC-V(※1)”を実施しています。前者は、全般的な知的発達水準を知るために主に就学相談において、後者は問題の能力的な背景を知るために、教育相談と一部の就学相談において実施しています(※2)。

< ※1 本年度より WISC-IV から WISC-V に変更 ※2 本通信 第28・29号参照 >

知能検査（特にWISC-V）から得られる情報は貴重ですが、それを支援に生かすかどうかで**情報のもつ価値が左右されます**。検査結果に期待していながら、「そうだったのか」「やはりそうか」とさりと受け流すだけで、個別の指導計画や日々の指導に反映させないのでは、1件に約10時間を費やして、準備・実施から集計・解釈・説明までを行う意味が薄れてしまいます。

そもそも知能検査を実施しなければ、アセスメントやそれを踏まえた適切な指導はできないのでしょうか。小学校勤務のキャリアをもつ早稲田大学大学院の 高橋あつ子 教授は、近著「学校で教師ができるアセスメント」（北樹出版）の中で、次のように述べています。

「心理検査や診断は有益です。しかし、それとは違う次元で、教師が学校でできるアセスメントは、幅広く深く、子どもの輪郭に迫れる作業です。子どもの苦戦や伸び悩み、トラブルの根源に近づき、伸びしろや適した支援方法を見出せる可能性を秘めているのです。」

知能検査の結果情報がある子は、ごく一部に限られています。多くは学校での観察情報（テスト結果や作品等の成果物の状況を含む）などから、教師が問題の成り立ちを見立て、創意工夫を凝らして指導しています。かすたネットの相談活動も同様に、子どもの姿や成果物、先生方からの聞き取りなどを主な情報源として進められます。

様々な情報を組合せて子どもをアセスメントするに当たっては、**背景要因にはどのようなことが考え得るのかや、背景要因と状態像との関係（こういう問題・困難さがあると、こんな状態像を呈し得るということ）**について理解しておきたいものです。



背景要因や事情を踏まえて指導を工夫するより、子どもが自覚・反省・改善・努力すべきとの精神的な思考に囚われて、叱咤激励ばかりの対応であったり、指導が困難と見るや、「この子を何とかしてください」「もうこれ以上は見られません」「通常学級では無理な子です」など、丸投げ・放棄とも受け取れる発言を平然としてしまったりすることは、厳に慎まなければなりません。連携・協力は大事ですが、まずは引き受ける覚悟と、柔軟な思考による指導の工夫が求められます。



担当：学校生活適応支援アドバイザー 飯山・大瀧
TEL 639-4392 / 支援要請は 639-4381 諸伏・石川